

The 8th JEA-KAE Joint Scientific Meeting に参加して

新潟大学大学院医歯学総合研究科 重谷 佳見
口腔健康科学講座う蝕学分野

2010年3月27日、28日に韓国の釜山（プサン）で開催された「The 8th JEA-KAE Joint Scientific Meeting」での発表の機会を得ましたので、ご報告させていただきます(写真1)。これは韓国の歯内療法学会が主催する学術大会で、私にとって日本以外ではアジア圏2ヶ国目（1ヶ国目はタイ）の訪問ということもあり、ワクワク胸を躍らせ、学会に参加してきました。

釜山は韓国の南東部にあり、対馬海峡に面し、朝鮮半島と日本とを結ぶ交通の要衝として栄えてきた港町です。また、ソウルに次ぐ韓国第二の都市として政治・経済・文化の面で重要な役割を担っています。現在は韓国最大の港ですが、かつては富山浦と呼ばれる一漁港に過ぎなかったそうです。当時、この地方の中心は現在より10kmほど内陸に入った所にあり、釜山と改名されたのは16世紀以降のことで、山の形が鉄釜に似ていることに由来しているそうです。有名な関釜フェリーが下関との間を結んでいるほか、博多や大阪、対馬など日本からの旅客船が多く、地理的にも近いことから古くからさまざまな面で日本との関係が深い町であります。その釜山の海雲台（ヘウンデ）とい

う所に宿泊しました。約2kmに渡って続く美しいビーチ(写真2)は、昔から詩や文学の題材になってきたという釜山でも有数の景勝地であります。美しい海岸に沿って国際的なホテルが立ち並び、マリンスポーツ、カジノ、温泉、免税ショッピングとリゾートライフを満喫できる所です。が、学会があった季節は3月ということもあり、まだまだ寒くビーチを楽しむには無理のある季節でありました。

私は、大学院時代より、「レーザーの歯科治療への応用」を大きなテーマとして、研究に取り組んできました。一言で、歯科用レーザーと言っても、様々なものがありますが、主に歯の切削の可能なEr:YAGレーザーと組織透過性がある半導体レーザーについて、研究を進めております。今回、半導体レーザーについて、「Gene Expression of Mineralized Tissue Matrix Proteins in GaAlAs Laser-irradiated Rat Molars」という題で発表させていただきました(写真3)。ラットの臼歯に強い出力で半導体レーザーを照射すると、歯髄内に新生硬組織形成が認められます。この硬組織形成機構、あるいは非コラーゲンタンパクの歯髄創傷治癒過程への関



写真1 会場のBEXCOにて(左から山中先生、興地教授、大倉先生、重谷)

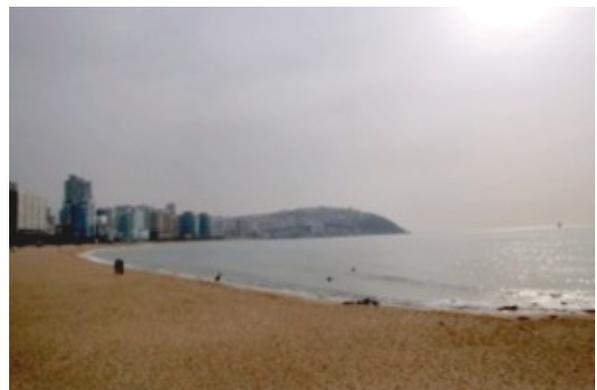


写真2 海雲台（ヘウンデ）ビーチ

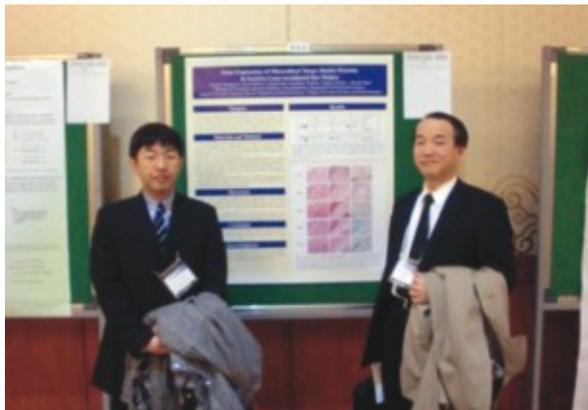


写真3 ポスターの前にて



写真4 懇親会場の様子

与の一端を知ることを目的として、RT-PCR法を用いて、SIBLINGタンパク（OPN、DSPP、DMP1、BSP）およびOC、ONの遺伝子発現の経時変化について検索を行い、発表をしてきました。本学会では、歯内療法を専門とする主催側の韓国をはじめ、日本からも大勢の先生が参加されており、いろいろと討論が出来、異なった観点からの着眼点により普段では気がつかない事などご意見を頂きました。他国の研究者の方とさまざまな情報交換が出来、さらに研究意欲が増し、私にとって有意義な時間を過ごす事が出来ました。一方で、コミュニケーションは当然英語のため、私のPoor Englishでは、「まだまだダメだなあ。」と考えさせられる時間でもありました。講演は、韓国と日本からだけでなく、「The root canal preparation with the M two system: the simultaneous technique」のテーマでイタリアのDr. Antonio Malagnino (Univ. Chieti)、また、「Endo vs. Single implant」のテーマでアメリカからProf. Syngcuk Kim (Univ. of Pennsylvania) など、この分野では著名な先生方が招待されており、貴重な講演を拝聴することが出来ました。学会の後は、参加された先生方との懇親会がありました(写真4)。マッコリや韓国料理（特に釜山ならではの、タコがのどに吸いつく踊り食いなど）を堪能しながら、楽しい一時を過ごすことが出来ました。

学会以外の時間は、せっかく異国の地にやってきたのですから、韓国の生活に触れてみるべく、多少は観光をしてみました。移動は主にタクシー



写真5 焼き肉店にて

や地下鉄です。乗り物の乗り方は各国でまちまちですが、隣国とは言え韓国もまた、日本とは勝手が全く違いました。さて、釜山は港町ですがやはり韓国なので、一番に体験しておきたいのが焼き肉。地元でも有名な焼き肉店へ赴き、美味しい焼き肉と激辛キムチを堪能致しました。店員さんが肉を焼く際の巧みなハサミ捌きには驚きです(写真5)。また、国際市場という市場にも行ってきました。古くから貿易港として栄えた釜山で戦後のヤミ市が前身となっているようで、約1,400もの小さな店や屋台がひしめき合う市場です。衣料品、雑貨から文房具、日用品などありとあらゆる種類のものがとにかく安く手に入り、露店も多く見られました。細い道が迷路のようになっているので迷子になってしまいそうでした。

学会では多くの収穫があり、また、異国の文化にも触れることができ、本当に有意義な時間を過ごすことが出来ました。最後になりましたが、このような機会を与えて下さった興地隆史教授、はじめ、共同研究者の皆様にご心より感謝の意を表します。

Society of Oral Physiology

—Store Kro 26 th Conference in Dresden に参加して

口腔生理学分野 黒 瀬 雅 之

Store Kro 26 th Conference (2009. 5. 8-10)にて発表の機会を頂きましたので、ここに報告いたします。この学会に初めて参加したのは、私が大学院4年生の時が最初で、今回が2回目となります。学会と呼ぶほど、大規模なものではなく、参加者も100名前後の非常に小さい懇話会に近いようなものです。今回はドイツで開催され、前回はフィンランド、前々回はアイスランド、その前は私が出席しましたベルギーで開催されております。次回大会はイタリアです。国名を見て頂くとお解りかと思いますが、この学会はヨーロッパのみで開催され、ヨーロッパ各国を持ち回りで2年に1度開催されております。参加者は、ヨーロッパの研究者が大部分で、そこに日本と台湾の研究者を加えた程度です。よって、最も多いはずの北米の研究者が全くいないのが特徴です。また、ヨーロッパと言っても、イギリスの研究者もあまりお見かけしないのも特徴です。参加者の分野ですが、ほとんどは口腔生理に関係する人達ですが、ヨーロッパでは補綴学の臨床家が生理学の講義をすることも多いため、基礎系の研究者の集いと言うよりは、補綴学の臨床研究者の集いという印象が強いかもかもしれません。また、この学会の特徴として興味深いのは、参加者には配偶者で

あったり恋人であったり同伴者の参加を推薦している部分です。私は残念ながら、子供が小さいので、妻を連れて行かずに、山村教授と一緒に関西空港より出発しました。

今回の開催地でありますドイツ・ドレスデンですが、ご存じの方もおられるかと思いますが、旧東ドイツに位置し、ドイツの南東部のチェコ共和国との国境に位置するエルベ川に面した風光明媚な都市でした(Fig. 1)。また、世界的に有名な陶磁器のメーカーであるマイセンの工場のあるマイセン市も近いので、世界から多くの観光客の来る街です。日本からの観光客も多いようで、街のレストランにはよくある翻訳ソフトを使った解読困難な日本語ではなく、ちゃんとした日本語の記載がありました。さて、街中ですが、第二次世界大戦時、教科書などにも載っているドレスデン爆撃の際にイギリス・アメリカの激しい爆撃に会い、かなりの歴史的遺産は消失してしまったようですが、ドイツ統合後に国や民間の寄付などにより多くの建造物が復旧しております。その中でも有名な遺産として、ドレスデン城の「君主たちの行列」があります(Fig. 2)。これは、爆撃の中でも消失することなく残存した長さ100メートルを超える25,000枚ものマイセンの陶器のパネルを用

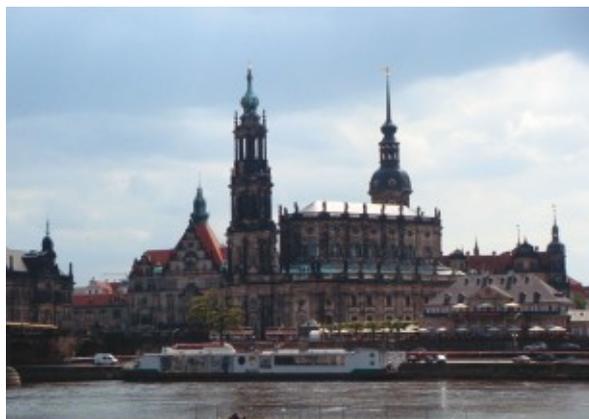


fig. 1



fig. 2

いた壁画です。君主「達」ですから、このドレスデンを支配していたザクセン王国の過去の王達が描かれています。また、1700年代に建築されたツヴィンガー宮殿も、独特のバロック建築の建物として有名です(Fig. 3)。また、爆撃で完全に崩壊し、さらに東ドイツによる政権下では瓦礫のまま放置されていた聖母教会が2005年に再建され、観光名所の1つになっております(Fig. 4)。この再建に関しては、日本のテレビで紹介もされており、関心を持って見る事が出来ました。再建工事と言っても、昔の写真に似たように作るのではなく、放置されていた瓦礫を使ってパズルを組み合わせるようにして作ったということで、その努力は素晴らしいものであると思います。と、観光ガイドのようなことを記載しているので、学会中に抜け出して観光ばかりしていたのでは？と思われるかもしれませんが、実はそうではありません。この学会が、他と大きく異なる部分として、学術的な発表を午前中に行った後、観光ガイド付きの観光ツアーを午後に参加者全員で行うことです。ということで、短時間で効率よく観光地を回ることが可能であり、決して抜け出して観光をし、これらの情報を得たわけではありません。

学会の方ですが、私は2日目の昼食前のポスターセッションで発表させて頂きました。内容は、「電気刺激を用いた嚔下反射の誘発方法の確立」です。このテーマは、発表を行う1年程前に、安全に嚔下を誘発出来る方法として電気刺激が使えるのでは？と、山田好秋副学長が思いつき、それを口腔生理学分野の構成員や大学院生などで試行錯誤しながら完成させた手法です。私自身は、



fig. 3

当初は色々と思案する大学院生の後ろから、ああでもないこうでもないコメントという名前の文句を言っただけでしたが、その後は実際の電気生理学的な実験を担当しましたので、発表するチャンスを頂くことが出来ました。発表では、先述しましたように、この学会の参加者の大部分は臨床家ですので、興味深いというコメントを多く頂くことが出来ました。しかしながら、どうしても英会話力に難がありましたので、細かい説明が出来なかったのが残念で仕方ありません。

発表が終わった後、前述しましたドレスデンの街の観光ツアーがありました。そして、夜ですが、毎回恒例のドレスアップをした Dinner Party がありました。本来ですと、タキシードを着てというようなのが欧州スタイルなのかもしれませんが、さすがに荷物ですので、少し高価なスーツを日本より持参し、Partyに参加しました。Partyでは、フランス料理のフルコースが出され、その間にハーブの生の演奏があるなど、日本にいるとなかなか体験出来ないような時間を過ごすことが出来ました(Fig. 5)。ただ、Partyがなんといっても長いです。夜の8時から始まり、終わったのが0時30分くらいだったはずですが、幸か不幸か、私のテーブルは若い大学院生くらいの人たちにより構成されており、そんなに緊張することなく食事を楽しむことが出来ました。

最終日は、半日で学会は終了しましたが、帰国の便が午前中でしたので、ドレスデン美術館にて



fig. 4

有名なラファエッロの『サン・シストの聖母』とフェルメールの『手紙を読む女』を鑑賞し、日本への帰路につきました。

この Store Kro meeting は他の学会とは大きく異なった学会で、日本人のあまり知らない欧州特にフランス系の文化というのを感じるこの出来る貴重な学会であると思います。また、小さい学会であるからこそ、世界的にも有名な研究者がすぐ側にいたりして、さらに非常に気さくに対応して頂けるなど、学術的にも貴重な学会であると思います。

最後に、このような貴重な機会を与えて頂きました、山田好秋副学長並びに口腔生理学分野 山村健介教授、また、学会発表を行う上で多くの分野で多大なる貢献をしてくださった日本歯科大学 杉野伸一郎助教にも深く感謝を申し上げます。私は現在、米国に研究留学の機会を得て、ニューイングランド大学に滞在しておりますが、早くから海外での発表や研究者との交流などの機会を提供して頂いた結果とっております。お世話になった先生方に深く感謝いたします。



fig. 5

